

藤原定家の漢字使用について―伊達家旧蔵本『古今和歌集』巻第一を中心に―

宮崎 若菜

一 研究の目的

藤原定家の仮名遣、あるいは仮名文字遣の実態とその用法を明らかにしようとする研究は数多く存在する。⁽¹⁾

近年は仮名の用法だけでなく、漢字の用法にも注目が集まっている。例えば、清水義秋氏（一九七三）は定家が『土左日記』を書写する際の「漢字の充当」に着目し、和歌と地の文とでその充當意識に差があることを指摘した。⁽²⁾

他に漢字使用率から定家の漢字使用の様相を捉えようとした研究としては、村田正英氏（二〇〇六）の研究に注目したい。村田氏は漢字とその字訓との対応関係を調査し、定家の「頻用の漢字」を明らかにしている。

しかし、村田氏の研究では調査の対象が和歌にのみ使用される漢字にとどまっており、定家の漢字使用を体系的に明らかにするには至っていない。

そこで本稿の筆者は定家の漢字使用について体系的に明らかにするため、複数の定家自筆写本の和歌と地の文（詞書、和歌の作者を含む）を対象として、漢字使用率の観点から定家の漢字使用について分析を行っている。

本稿では、伊達家旧蔵本『古今和歌集』を対象とした調査、分析を

試みたい。すなわち、本稿は伊達家旧蔵本『古今和歌集』における定家の漢字使用率を調査し、定家の「常用的漢字」と「通用的漢字」を明らかにしたうえで、地の文との比較において特徴的であった和歌での漢字使用について考察することを目的とする。

二 研究の方法

まず、伊達家旧蔵本『古今和歌集』巻第一を対象範囲とし、本文を単語に区切り、品詞、漢字か仮名か、詞書か和歌かなどの観点から本文のデータ入力・解析を行い（次頁の表1参照）、漢字使用率を調査する。⁽³⁾ なお、地の文の漢字の読みが判然としない場合は『新編日本古典文学全集11 古今和歌集』（小学館、二〇一五）を参照し、漢字の読みを同定する。

次に、伊達家旧蔵本『古今和歌集』巻第一における漢字使用率と「常用的漢字」「通用的漢字」を明らかにする。そのうえで、和歌と地の文（詞書と作者）、それぞれにおける定家の漢字使用について考察を行う。

先行研究では「常用の漢字」や「頻用の漢字」などの用語が用いられており、定家の使用漢字に対する統一的な名称は定まっていない。⁽⁴⁾ そこで、本稿においては定家の漢字を便宜的に「常用的漢字」と「通用的漢字」とに区別して考える。本稿では同一の語に複数の漢字を使

用した例はないため、「常用的漢字」「通用的漢字」は以下のように定義する。

- ・「常用的漢字」…用例が複数あり、漢字使用率が八〇パーセント以上である語に使用される漢字。
- ・「通用的漢字」…漢字使用率が八〇パーセント未満で漢字と仮名を併用する語に使用される漢字。

表 1 伊達家旧蔵本『古今和歌集』巻第一解析表冒頭

巻	所在	書字形 (=表層形)	字母・ 字体	原形	字種	行頭／ 行末／ 改行	和歌／ 詞書／ 作者	形態素 ・品詞	漢字	注記
巻第一	1 (28)	ふるとし	布るとし	旧年	仮名		詞書	名詞		
巻第一	1 (28)	に		に	仮名		詞書	助詞- 格助詞		
巻第一	1 (28)	春		春	漢字		詞書	名詞	春	
巻第一	1 (28)	たち		立つ	仮名		詞書	動詞		
巻第一	1 (28)	ける		けり	仮名		詞書	助動詞		
巻第一	1 (28)	日		日	漢字		詞書	名詞	日	
巻第一	1 (28)	よめ		詠む	仮名		詞書	動詞		
巻第一	1 (28)	る		り	仮名		詞書	助動詞		
巻第一	1 (28)	在原元方		在原元方	漢字		作者	名詞	在原元方	
巻第一	1 (28)	とし		年	仮名	行頭	和歌	名詞		
巻第一	1 (28)	の		の	仮名		和歌	助詞- 格助詞		
巻第一	1 (28)	うち		内	仮名		和歌	名詞		
巻第一	1 (28)	に		に	仮名		和歌	助詞- 格助詞		
巻第一	1 (28)	春		春	漢字		和歌	名詞	春	

三 対象資料について

『古今和歌集』は、定家が生涯にわたって幾度も書写したことが知られている。その中でも、伊達家旧蔵本『古今和歌集』は定家自筆の『古今和歌集』の写本の中で、現存する唯一の完本である。⁽⁵⁾そのため、本文全体を通しての調査が可能である。

以上の理由から、伊達家旧蔵本『古今和歌集』を対象資料とする。本文は、久曾神昇編『笠間文庫影印シリーズ2 伊達本古今和歌集 藤原定家筆』(笠間書院、二〇〇八)によった。

四 伊達家旧蔵本『古今和歌集』巻第一の漢字使用の実態

1 品詞ごとの異なり語数

巻第一の本文を全体的に見てみると、異なり語数は四二二であり、そのうち、漢字のみ使用する語が八四語、漢字と仮名を併用する語が三〇語、仮名のみ使用する語は三〇八語であった。品詞ごとに漢字使用率が異なることが予想されるため、まず、品詞ごとの異なり語数を調べた。⁽⁶⁾その結果を表2として次頁に示す。以下、本稿では原形(辞書の見出し)を山括弧で示し、実際の本文に見られた書字形・漢字は鉤括弧で示す。

表2より、異なり語数が最も多いのは名詞であり、次に多いのが動詞であることがわかる。また、漢字のみ使用する語の数も名詞が最も多い。名詞は名詞全体の語数を勘案しても、他の品詞と比べて漢字を使用する語が多い。つまり、漢字の使用は名詞に偏っているといえる。

また、名詞の中で最も用例数の多い(花)(四〇例)は、漢字使用率が九八パーセントであるのに対し、動詞の中で最も用例数の多い(詠む)(三二例)は、決して漢字を使用することではなく、全て仮名を使用

している。和歌集であるため、〈詠む〉は全巻を通して多用されるところと考えられる動詞であるにもかかわらず、巻第一では、徹底して仮名を使用しているということである。このことから、漢字を使用する語と、漢字を一切使用しない語に何らかの使い分けがあると考えることができよう。

表2 品詞ごとの異なり語数

	名詞	動詞	助動詞	助詞	形容詞	その他	計
漢字のみ	63	9	0	3	0	9	84
漢字仮名併用	22	0	2	0	0	6	30
仮名のみ	107	111	17	34	18	21	308
計	192	120	19	37	18	36	422

2 漢字使用率から見た「常用的漢字」と「通用的漢字」

次に、漢字のみ使用する語（八四語）と、漢字と仮名を併用する語（三〇語）の計一一四語について見ていく。

漢字のみ使用する語（本稿末尾資料表3参照⁽⁷⁾）のうち、用例が複数あるのは表3の通し番号1から28までの二八語である。この二八語に使用される漢字は、ひとまず「常用的漢字」であるといえる。

ただし、「混」として計上した用例には仮名も含まれるため、注意が必要である。具体的には、3〈題知らず〉「題しらす」一二例、4〈詠人知らず〉「よみ人しらす」一二例、5〈桜花〉「さくら花」六例、14〈素性法師〉「そせい法師」一例、19〈暗部山〉「くらふ山」二例、20〈都〉「宮」二例、23〈二条后〉「二条のきさい」二例、28〈山里〉「山」と二例が挙げられる。

以上を踏まえると、「常用的漢字」は「人」「見」「題」「花」「時」「山」「水」「我」「家」「伊勢」「日」「法」「柳」「衣」「心」「思」などがそれにあたる。

これらの「常用的漢字」のほぼ全てが名詞である中で、動詞〈見る〉〈見ゆ〉〈思ふ〉に常に漢字を使用することは特筆すべきであろう。前項で確認したように、動詞の中で最も用例数の多い語は〈詠む〉である。しかし、〈詠む〉には一切漢字を使用せず、〈見る〉〈思ふ〉などに漢字を使用している理由について、筆者は明確な答えを持っていない。ここでは、〈詠む〉が地の文（詞書）で使用され、かつ、ほぼ全ての用例が「よめる」という語形であるということと、〈見る〉〈思ふ〉などが数多くの複合語を形成しており、それらの複合語を含めると〈詠む〉より使用頻度が高いことが関係している可能性を指摘するにとどめる。

漢字と仮名を併用する語（本稿末尾資料表4参照）のうち、用例が複数あり全体の漢字使用率が八〇パーセントを超えるのは、表4の通し番号1から4までの四語である。すなわち、「花」「雪」「年」「梅」が「常用的漢字」であると考えられる。また、表4の通し番号5から30までの二六語に使用される漢字は、ほぼ「通用的漢字」であるとい

える。⁽⁸⁾

五 和歌における漢字使用

表4の和歌と地の文（作者・詞書）における漢字使用率に着目すると、和歌では漢字使用率が著しく高いのに対し、地の文では低い語があることに気付く。具体的には、表4の6〈春〉「春」、12〈夜ヨ〉「夜」の二語である。特に、〈春〉は全体の用例数が多く、その傾向が顕著に見られる。〈春〉三二例の表記の内訳を表5として次に示す。⁽⁹⁾

表5 〈春〉の表記の内訳とその位置

仮名		漢字		
八る	者る	春		
0 (0%)	2 (29%)	7 (30%)	和歌	行頭
0 (0%)	3 (43%)	1 (4%)	地の文	
1 (100%)	1 (14%)	15 (60%)	和歌	行頭以外
0 (0%)	1 (14%)	1 (4%)	地の文	
1 (100%)	7 (100%)	24 (100%)	計	

漢字「春」は行頭・行頭以外に関わらず、和歌に多く使用される。それに対し、仮名「者る」は行頭での使用割合が高く、特に、地の文（詞書）に用例が多い。すなわち、和歌には主に漢字「春」を使用し、

詞書の、特に行頭に〈春〉が来る場合には仮名「者る」を使用する傾向があるといえる。同様の傾向を示す語に、表4の4〈梅〉「梅」がある。〈梅〉は、地の文（詞書）の仮名「うめ」三例が全て行頭である。このような傾向が見られる要因として、行頭においては語境界がはっきりしているため、漢字を使用せずとも語認定が容易であることが挙げられる。また、表4の上部に来る語は、『古今和歌集』巻第一、つまり「春哥上」のキーワード（春歌を表す代表的な語）であることも、漢字を使用した要因の一つであると考ええる。

逆に、和歌では仮名が使用されるのに対し、地の文では漢字が使用される語がある。それが表4の16〈山桜〉「山」、17〈帰る〉「帰」の二語である。ただし、どちらも現段階では用例数が少ないため、さらに用例を集めて調査する必要がある。

以上のことから、定家は和歌と地の文とで漢字と仮名を使い分けていたと考えることができる。

六 成果と今後の課題

本稿において明らかとなったことは、以下の五つである。

- (1) 漢字を使用する語と漢字を一切使用しない語（仮名のみを使用する語）とが存在すること。
- (2) 定家の「常用的漢字」は「人」「見」「題」「花」「時」「山」「水」「我」「家」「伊勢」「日」「法」「柳」「衣」「心」「山」「宮」「今」「二」「条」「松」「風」「君」「思」「山」「花」「雪」「年」「梅」などがそれにあたること。
- (3) 定家の「常用的漢字」はほぼ全てが名詞であること。
- (4) 動詞で最も用例数の多い〈詠む〉には漢字を使用せず、〈見る〉〈見ゆ〉〈思ふ〉に漢字を使用すること。

(5) 定家は和歌と地の文とで漢字と仮名を使い分けていたと考えられること。

(1)(2)(3)について、定家が『古今和歌集』をはじめとする仮名文を書く際に使用した漢字やその用法が、当時、一般的なものであったかどうかは、今後さらに検討を重ねていく必要がある。

(4)の要因としては、以下の二点が関係している可能性があることを指摘した。一点めは、〈詠む〉が地の文(詞書)で使用され、かつ、ほぼ全ての用例が「よめる」という語形であるということ。二点めは、〈見る〉〈思ふ〉は数多くの複合語を形成しており、それらの複合語を含めると〈詠む〉より使用頻度が高いことである。

(5)の和歌と地の文とで漢字と仮名を使い分けた語としては、〈春〉、〈夜・ヨ〉、〈山桜〉、〈帰る〉の四語が挙げられる。〈春〉については、和歌には主に漢字「春」を使用し、地の文(詞書)の、特に行頭において仮名「春る」を使用する傾向があるとわかった。より顕著な傾向を示す語として〈梅〉があることも指摘した。

このような傾向が見られる要因として二点挙げられる。一点めは、行頭においては語境界がはっきりしているため、漢字を使用せずとも語の認定が容易であること。二点めは、これらの語が、『古今和歌集』巻第一「春哥上」の和歌を表す代表的な語であることである。

一点めについては、〈都〉「宮」のような、いわゆる「宛字的用法」⁽¹⁰⁾が見られることから、定家は漢字の使用に際しては、その漢字の字義のみならず、読みやすさ(語認定のしやすさ)に重点を置いていたことが推測される。特に、和歌においてその漢字が使用されていることに鑑みると、清水氏(一九七三)の論の「歌における漢字表記には、歌人・歌学者として、むしろ積極的に達意を図らうとする用字意識があったやうである。これは家学・道統のために明快なテキストを作製

しようといふ教學的意図に発するものであらう」(一五頁)という点は首肯できる。

二点めについては、「達意を図らうとする用字意識」に加えて、二つのねらいが関係している可能性を指摘しておきたい。一つめは『古今和歌集』の和歌を書写する際の大枠の方針として、一行に収めようとするねらいである。二つめは、語認定を容易にし、定家自らの和歌の解釈を誤解のないように伝えようとするねらいである。表語・表意機能を持つ漢字を、和歌の中のキーワードとなる語に用いることは、これらのねらいを達成することに有効であったと考える。

村田氏(二〇〇六)は、定家が和歌に漢字を使用したことについて、「文中に頻出する語は、労力・時間の節約やスペースの有効利用の必要性から、漢字で書かれる可能性が高かったということであろうか」(二〇三頁)としている。しかし、伊達家旧蔵本『古今和歌集』の和歌は、必ずしも一行に収まっているわけではなく、スペースが足りずに折り返して書写している箇所がいくつも見られる。つまり、もしスペースを有効利用したのであれば、より多くの漢字を用いれば良かったはずである。

以上のことから、定家が追究したのは、「労力・時間の節約やスペースの有効利用の必要性」ばかりではなく、自らの和歌の解釈を読み手に正確に伝えることであつたといえる。

今後はさらに調査範囲を広げ、〈山桜〉や〈帰る〉など、用例が少なかった語についても分析する必要がある。

また、定家がどのような場合に漢字を使用したのかという点や、和歌における漢字使用の意義については、他者筆写本(雅経本『崇徳天皇御本古今和歌集』など)との本文比較などを通してさらに考察していきたい。

注

- (1) 石坂正蔵「定家の区別した仮名について」(『国語学』巻四六、六九頁、七六頁、一九六一年)、植喜代子「藤原定家の変体仮名の用法について」(『国文学攷』第八二号、一九七九年)、大野晋「仮名遣と上代語」(岩波書店、一九八二年)、福島直恭「定家仮名遣の社会的意義」(『国語学』巻一六六、一頁～二頁、一九九一年)、奥野陽子「藤原定家の用字法——自筆本拾遺愚草における仮名の異なる掛詞を中心に——」(『国語国文』第六八巻、第八号、四〇頁～五六頁、一九九九年)、迫野虔徳「方言史と日本語史」(清文堂、二〇一二年)、矢田勉「国語文字・表記史の研究」(汲古書院、二〇一二年)、佐々木勇「御物本『更級日記』の仮名字体について」(『論叢国語教育学』9巻、二〇一三年)など、多数。右は発表年順に示している。
- (2) 檜田良照氏(一九八八年)は、定家が「どのような漢字(字種)を、どのように用いるか(用法)ということ」を定家の「漢字遣い」と呼び、定家の漢字使用について言及している。
- (3) 解析項目は左から「所在」「書字形(＝表層形)」「字母・字体」「原形」「字種」「行頭／行末／改行」「和歌／詞書／作者」「形態素・品詞」「漢字」「注記」である。「字母・字体」は本研究の目的に直接に係するものではないため、現在は特徴的な文字遣の語のみ入力している。「所在」は歌番号(頁数)を表している。頁数は久曾神昇編『笠間文庫影印シリーズ2 伊達本古今和歌集 藤原定家筆』(笠間書院、二〇〇八年)によった。語の区切りは原則として『日本国語大辞典』(第二版)の見出し語であるかどうかを基準とした。『日本国語大辞典』(第二版)に見出し語のないものや、単語の成り立ちに諸説ある語などについては、形態素解析ソフト「Web 茶まめ」と『新編日本古典文学全集11 古今和歌集』(小学館、二〇一五年)を参照して語認定をし、解析を行った。なお、
- (4) 足引の「や(石走る)」などの枕詞はこれ以上語を分割することなく、枕詞で一語とした。
- (5) 村田氏(二〇〇六年)は同論文中にどちらの語も使用している。
- (6) 名称は長く伊達家が所蔵していたことによる。
- (7) 語の一部のみに漢字を使用する例(例えば「見る」「さくら花」など)も、漢字を使用しているものと判断した。なお、行と行の間などに見られる注釈的書き入れは調査の対象としなかった。
- (8) 「作者」は和歌の作者(詠人知らず)を含む、「詞書」は原則として和歌の前文(場合によっては和歌の後の文も含む)を指す。また、「混」とは、「よみ人しらす」のように複数の要素で成り立つ語の場合に、漢字と仮名を混用していると判断できるものを指す。漢字使用率は、「漢字」と「混」を合わせた用例数を用いて算出している。本文中の「御」の読み方は『新編日本古典文学全集11 古今和歌集』(小学館、二〇一五年)によった。
- (9) ほぼ、としたのは表4の通し番号10(寛平御時后宮歌合)では、キサイ(后)に漢字を使用する例がなかったからである。(寛平御時后宮歌合)の四例の内訳は「寛平御時きさいの宮の哥合」が三例、「寛平御時きさいの宮のうたあはせ」が一例となっている。さらに、ニジョウノキサキ(二条后)でもキサキ(后)は必ず仮名を使用し、「きさき」と表記している。このことから、「詠む」と同様に、「后」も漢字「后」を使用しない、何らかの要因があると考えられる。
- (10) ハの音節にあたる仮名字体は現行の字体と異なるため、それぞれ字母である漢字「者」「八」で示している。
- (11) 檜田氏(一九八八年)は、「あか月」「つは物」の例を用いて説明している。

参考文献およびURL（筆者・作者五十音順）

〈文献〉

- ・小笠原一「定家自筆本三代集 和語表記の漢字の用法（一）―古今和歌集を中心に用字法を探索―」『都留文科大学研究紀要』第41集、一九九四年）
- ・小沢正夫、松田成穂校注・訳『新編日本古典文学全集11 古今和歌集』（小学館、二〇一五年）
- ・久曾神昇編『笠間文庫影印シリーズ2 伊達本古今和歌集 藤原定家筆』（笠間書院、二〇〇八年）
- ・柴田雅生「定家筆『更級日記』漢字字体表」（『活水論文集 日本文学科編』第33集、一九九〇年）
- ・柴田雅生「定家仮名資料の漢字字形と仮名」（『活水日文』第23号、一九九一年）
- ・清水義秋「定家の用字と注釈意識―漢字の場合―」（『相模工業大学紀要』第7巻、第1号、一九七三年）
- ・檜田良照「定家本『更級日記』における漢字の用法について」（『佐賀大國文』第12号、一九八八年）
- ・村田正英「藤原定家自筆平仮名文三種における和語表記の漢字」（『鎌倉時代語研究』第1巻、一九七八年）
- ・村田正英「冷泉家時雨亭文庫蔵『古来風躰抄』における和語表記の漢字―藤原定家自筆平仮名文との比較―」（『鎌倉時代語研究』第18巻、一九九五年）
- ・村田正英「藤原定家自筆『拾遺愚草』における和語表記の漢字―使用頻度に着目して―」（『鎌倉時代語研究』第23巻、二〇〇〇年）
- ・村田正英「漢字使用率から見た定家筆平仮名文における頻用の漢字―『奥入』『嘉禄本古今和歌集』『拾遺愚草』を比較して―」（『国語学論集 小林芳規博士喜寿記念』一七九頁―二〇三頁、汲古書院、二〇〇六年）

〈URL〉

- ・国文学21Cプロジェクト「藤原定家の著作と平安朝古典籍の書写校勘に関する総合データベース」<http://genjiemuseum.web.fc2.com/kenkyukai.html>（二〇一九年五月二十八日最終閲覧）
- ・国立国語研究所「Web茶まめ（安定版）」
<https://unide.ninjal.ac.jp/chaname/>（二〇一九年五月二十八日最終閲覧）
- ・「ジャパンナレッジ」<https://japanknowledge.com/library/>（二〇一九年五月二十八日最終閲覧）

（広島大学大学院博士課程前期二年）

表3 末尾資料
漢字のみ使用する語

通し 番号		作者				詞書				地の文の 漢字使用率	和歌				和歌の 漢字使用率	総計
		仮名	漢字	混	計	仮名	漢字	混	計		仮名	漢字	混	計		
1	人						10		10	100%		14		14	100%	24
2	見る						5		5	100%		14		14	100%	19
3	題知らず							12	12	100%						12
4	詠人知らず			12	12					100%						12
5	桜花											4	6	10	100%	10
6	時						7		7	100%		1		1	100%	8
7	山						1		1	100%		4		4	100%	5
8	見ゆ											4		4	100%	4
9	水						1		1	100%		3		3	100%	4
10	我											4		4	100%	4
11	家						4		4	100%						4
12	伊勢		4		4					100%						4
13	日						3		3	100%		1		1	100%	4
14	素性法師		3	1	4					100%						4
15	柳						1		1	100%		2		2	100%	3
16	衣-コロモ											3		3	100%	3
17	心											3		3	100%	3
18	月夜						1		1	100%		1		1	100%	2
19	暗部山							1	1	100%			1	1	100%	2
20	都												2	2	100%	2
21	今											2		2	100%	2
22	白雲											2		2	100%	2
23	二条后							2	2	100%						2
24	松											2		2	100%	2
25	風											2		2	100%	2
26	君-代名詞											2		2	100%	2
27	思ふ						1		1	100%		1		1	100%	2
28	山里												2	2	100%	2
29	御-オホン						1		1	100%						1
30	御歌							1	1	100%						1
31	凡河内躬恒			1	1					100%						1
32	言直		1		1					100%						1
33	大臣		1		1					100%						1
34	衣手											1		1	100%	1
35	谷風											1		1	100%	1
36	閏月							1	1	100%						1
37	ばかり											1		1	100%	1
38	年旧る												1	1	100%	1
39	哉											1		1	100%	1
40	在原業平朝臣		1		1					100%						1
41	在原元方		1		1					100%						1

42	峰										1		1	100%	1
43	涙										1		1	100%	1
44	山中											1	1	100%	1
45	誰-タレ										1		1	100%	1
46	山風										1		1	100%	1
47	山辺											1	1	100%	1
48	子		1		1				100%						1
49	京						1		1	100%					1
50	志											1	1	100%	1
51	白雪										1		1	100%	1
52	近院		1		1				100%						1
53	枝-エダ										1		1	100%	1
54	又は						1		1	100%					1
55	侍り						1		1	100%					1
56	見捨つ											1	1	100%	1
57	源當純			1	1				100%						1
58	若草											1	1	100%	1
59	谷										1		1	100%	1
60	花盛り						1		1	100%					1
61	旧り行く											1	1	100%	1
62	春宮						1		1	100%					1
63	花瓶						1		1	100%					1
64	亭子院歌合						1		1	100%					1
65	春方											1	1	100%	1
66	初花											1	1	100%	1
67	木						1		1	100%					1
68	業平の朝臣			1	1				100%						1
69	波										1		1	100%	1
70	み山											1	1	100%	1
71	錦										1		1	100%	1
72	白妙										1		1	100%	1
73	物思ひ											1	1	100%	1
74	笠										1		1	100%	1
75	梓弓										1		1	100%	1
76	もがな											1	1	100%	1
77	人ま											1	1	100%	1
78	仁和						1		1	100%					1
79	世の中										1		1	100%	1
80	見す										1		1	100%	1
81	是										1		1	100%	1
82	見遣る						1		1	100%					1
83	源宗于朝臣			1	1				100%						1
84	川										1		1	100%	1
計			13	17	30		41	21	62	100%		89	24	113	205

表 4 漢字と仮名を併用する語

通し 番号		作者				詞書				地の文の 漢字使用率	和歌				和歌の 漢字使用率	総計	全体の 漢字使用率
		仮名	漢字	混	計	仮名	漢字	混	計		仮名	漢字	混	計			
1	花					1	11		12	92%		28		28	100%	40	98%
2	雪					1	2		3	67%		10		10	100%	13	92%
3	年						2		2	100%	1	4		5	80%	7	86%
4	梅					3	4		7	57%		15		15	100%	22	86%
5	春霞										1	3		4	75%	4	75%
6	春					4	2		6	33%	4	22		26	85%	32	75%
7	袖										2	5		7	71%	7	71%
8	色										2	4		6	67%	6	67%
9	物										2	2		4	50%	4	50%
10	寛平御時后 宮歌合					2		2	4	50%						4	50%
11	み吉野										1		1	2	50%	2	50%
12	夜-ヨ					1			1	0%		1		1	100%	2	50%
13	霞										1	1		2	50%	2	50%
14	内										1	1		2	50%	2	50%
15	紀友則	1		1	2					50%						2	50%
16	山桜							1	1	100%	1			1	0%	2	50%
17	帰る						1		1	100%	1			1	0%	2	50%
18	昔										1	1		2	50%	2	50%
19	歌					5	4		9	44%						9	44%
20	鶯										7	4		11	36%	11	36%
21	らむ										6	3		9	33%	9	33%
22	給ふ- 尊敬					2	1		3	33%						3	33%
23	事					1			1	0%	1	1		2	50%	3	33%
24	野辺										2	1		3	33%	3	33%
25	折る					6			6	0%	5	4		9	44%	15	27%
26	雁					1	1		2	50%	2			2	0%	4	25%
27	あり					4			4	0%	8	2		10	20%	14	14%
28	なり- 断定					2	1		3	33%	10	1		11	9%	14	14%
29	立つ					3			3	0%	6	1		7	14%	10	10%
30	桜					8			8	0%	3	1		4	25%	12	8%
計		1		1	2	44	29	3	76	42%	68	115	1	184	63%	262	57%